

月刊

2012

10
月号

みんぱく

特集

数を操る、
数に操られる



農民の市場、数字の駆け引き 中川 理 ・ 病気を数える モハーチ・ゲルゲイ
木村の方程式 木村 大治 ・ 暴力の採点 樫永 真佐夫 ・ 一三ヵ月太陽の国 松村 圭一郎
勘定合って銭合わず 深田 淳太郎 ・ 脳の大きさと数 山極 寿一

国民的TVドラマと言われた「水戸黄門」、以前の私はあまり好きではなかった。「この紋所が目にはいらぬか」と、葵の紋章入り印籠を掲げるとみんなひれ伏す、あの威圧感がどうもなあと感じていた。

しかし今はずいぶん違っていて感じられる。先日も私が三人の男性と連れ立って歩いていたら、冗談で「ボクが黄門様なら、君たちはさしずめスケさんカクさん。そしてNさん、あなたはおつかり八兵衛かな」と話すと、粗忽者のつかり八兵衛がおイヤと見えて、「私は風車の弥七ということで」とNさんから返事が返ってきた。

会社組織に例えるなら黄門様は社長である。スケさん（助三郎）とカクさん（格之進）は、社長を「助け」、会社の「核（格）」ともなるべき有能な重役職であろう。兩名とも未だ社長の器ではないが、かつてスケさん役だった里見浩太郎が黄門様（社長）に昇進するというケースもあり得る。

「私は風車の弥七ということで」と自らの役どころを指定したNさんは、銀座の某ギャラリスト。ギャラリーの主役は作品であり画家や彫刻家である。しかしこれを引き立たせるために、ギャラリストは裏工作も含め、様々な仕掛けを工夫する。ならばN

プロフィール

1951年大阪市生まれ。美術家。京都市立芸術大学卒業、専攻科修了。一貫して「自画像的作品」をテーマに写真作品を作り続ける。『まねぶ美術史』(2010年、赤々舎)、『対談 なにものかへのレクイエム』(2011年、岩波書店)など著書も多数。2011年度、毎日芸術賞、紫綬褒章などを受賞。



「御老候」、旅の終わりに

もりむら やすまさ
森村 泰昌

さんが自分を忍びの者、弥七になぞらえたのも頷ける。

ところでNさんが御勘弁をと逃げたうっかり八兵衛であるが、営業成績向上には役に立たず、むしろ足を引く張りがねないキャラは確かに噴飯ものかもしれない。しかしみんなを笑わせたり、なごませたりする宴会部長のような八兵衛をリストラの対象にすべきかどうか、ここは考えどころである。八兵衛の処遇や如何これは組織トップの経営哲学に関わる、意外に重い問いかもしれない。「水戸黄門」はこのように、日本社会（あるいは会社）の縮図に思え、最近では面白くながめていたのだが、二〇一一年放映を終了した。スポンサーは松下電器（パナソニック）だった。

終身雇用と愛社精神を高らかに謳う日本型の会社組織の終焉とともに、黄門様ワールド（＝松下幸之助の精神）も引退ということなのかもしれない。私にはそれが、二〇世紀のどこかに大事な忘れ物を置いてきたかのように感じられてならない。しかし、かつて大学卒業とともに勤めた松下系大企業を三日でやめ、三日坊主と蔑まれた私の心境は単純ではない。今さらマツシタ万歳とも言えない。ちなみにウチのテレビはパナソニックだが。

月刊
みんぱく
10月号日次

- 1 エッセイ 千字文
「御老候」、旅の終わりに 森村 泰昌
- 2 特集
数を操る、数に操られる
2 農民の市場、数字の駆け引き 中川 理
4 病気を数える モハーチ・ゲルゲイ
木村の方程式 木村 大治
6 暴力の採点 樫永 真佐夫
7 一三カ月太陽の国——エチオピアの暦 松村 圭一郎
8 勘定合って銭合わず 深田 淳太郎
脳の大きさと数 山極 寿一
- 10 研究フォーラム
物質性を文化人類学する
古谷 嘉章
- 12 みんぱく Information
- 14 地球ミュージアム紀行
マテマティクム——ドイツの数学博物館
山中 由里子
- 16 連載リレー 知の収蔵庫
面白いモノ その2
宵祭りの品定め
笹原 亮二
- 18 多文化をあきなう
結ぶ→発信——学生のフェアトレード
藤間 萌
- 20 異聞逸聞
走ること理由
伊藤 敦規
- 21 みんぱく私の逸品
藁算
佐々木 利和
- 22 フィールドで考える
「なんくるないさ〜」とはいかない
沖縄離島の高齢者福祉
加賀谷 真梨
- 24 次号予告・編集後記

特集

数を操る、 数に操られる

日常のふとした瞬間から地球、宇宙規模の事象まで、さまざまな場面で「数」は現れる。数は客観的で普遍であるように思える。はたして本当にそうだろうか。

数を操っているはずの人間は、数に操られているのかもしれない。

商い、貨幣、医療、時間、スポーツ、暦など、国内外の事例から、数と人間の営みについて考える。

意味「ずるく」なくてはならない。お互いによく見知った仲間同士でさえ、自分の本当の販売価格を教えあったりはしない。取引開始の前にみんなが集まる市場内のバーでカフェ片手に教えあう販売予定価格も、鵜呑みにしていると馬鹿を見る。「三八サンチームで売るともりだ」ということを聞いて自分も同じ値段をつけていたら、そういつていた本人はじつはより安く三五サンチームで売っていた、などという話はよくある。周りの値段を吊り上げて取引を優位に進めようという戦略だ。農民の「個人主義」としてときに嘆きの種になるこのような行動ではあるが、それは同時に市場の醍醐味であるともいえる。しかし、おかげで価格は不透明になり、いったい相場は上がっているのか下がっているのかははっきりしなくなってしまう。

数字の両面性

毎日の価格をより透明にするための装置はある。それが一般にメルキュリアル(Mercuriale)とよばれる標準価格指標だ。毎朝、農産物市場の情報をおつかう国の機関に所属する係員数人が市場を訪れ、取引中の市場で直接聞き取りをおこなってそれぞれの品種について相場を確認する。相場の最高値、最低値、平均値、前日からの変動が算出されて市場で速報され、数時間後にはインターネットで公開されてどこからでも閲覧可能になる。こうして、客観的な

指標がえられるように見える。しかし、じつはメルキュリアルも当てにはできない。農民たちや商人たちは必ずしも本当の価格を係員に教えたりはしないからだ。農民たちの側では、仲間に対してと同じように高めに値段を言う傾向がある。商人たちの側では、農民に高値を要求されるのを嫌う人は低めに言い、価格指標が高いほうが転売に際して値を吊り上げるのによいと思う人は高く言ったりする。結果、メルキュリアルは現実を反映しておらず、大体的場合「はるかに高すぎる」のだという。係員自身、そのことを認めている。しかし、人びとはそれでもメルキュリアルの動きに注意を払っていて、それを参照しながら自分の戦略を決めている。口では「あんなものは嘘なので見ない」という人さえ、実際には係員に値段を聞きにきたりする。彼らは数字そのものを信用してはいないが、数字に独自の解釈を加えながら、他の経験的な手がかりと総合して行動している。彼らは自分が操ろうとする数字に、結果として判断を左右されるのである。

多くの人が指摘してきたように、数字は議論の余地のない客観性を与えてくれるものである。しかし同時に、数字は客観性を装いながら状況を操ろうとするものでもありうる。C市場のケースは極端であるにしても、数字のもつこの両面性を思い起こさせてくれる。

農民の市場、 数字の駆け引き

中川理なかがわ りん 立教大学准教授

市場の醍醐味

市場というのは、きわだって数字が飛び交う場所だ。ここでは、すべての会話は数字へと収束していくとさえいいいかもしれない。売り手と買い手は、それぞれよりよい価格を求めてさまざまな工夫を凝らす。フランス南部のある青果市場——ここではC市場とよんでおこう——もまた、そのような数字の駆け引きの場である。一九世紀半ばにつくられたこの歴史ある市場は、農民自身が仲買業者や卸業者に自分が作った野菜や果物を大きな単位で販売する生産者市場であり、生産物ごとに決められた短い時間内に、買い手が自分の欲しい商品をもっている売り手を探して取引量と価格を交渉する相対取引をおこなっている。毎朝、夜明け前の薄暗がりのなか、広大な露天の市場には何百台という車が集まり、(夏であれば)ズッキーニやトマトやメロンやリンゴや洋ナシをはじめとするありとあらゆる野菜や果物をめぐって、農民と商人が駆け引きを繰り返す。

市場では、売り手である農民たちはある

1920年代。町の中心にある広場に市が立てられていた



1958年に郊外に移転すると、C市場はさらに拡大した



メルキュリアルの速報値は、取引終了の直後に貼り出される



夜が明ける前に、C市場の取引ははじまる(写真は2012年8月末)

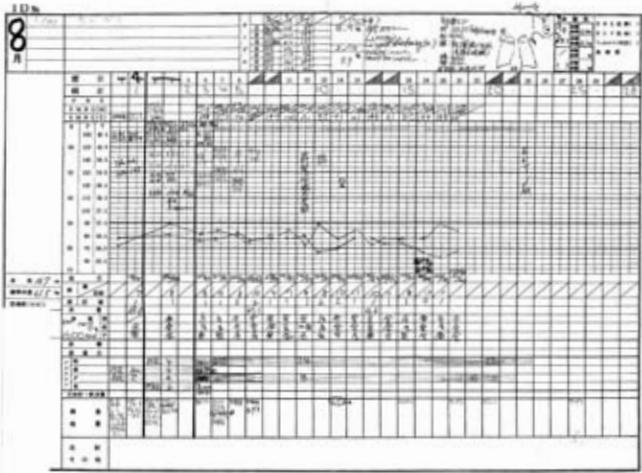
病気を数える

モハーチ・ゲルゲイ
慶應義塾大学先端研究センター研究員

普遍性と多様性

数字ほど非文化的なものはないだろうと思う人が多いかもしれない。マレーシアの熱帯雨林の奥地からシカゴの先端医療施設に至るまで、「三」は「三」でも「三」である。「Twenty-three volumes」と「三冊」はまったく同じものではないが、等しいものであることが数字からわかる。しかし人類学者は、「数字もまた多様なものではないか」と反論する。たとえば、一〇本の指で「一二三」などと数えるイギリスの子どもたちと、手と足を合わせた二〇本の指で計算する西アフリカのヨルバ族の子どもたちにとって「三三」という数のもつ意味は大きく異なるのではないかと。人類の普遍性を浮かび上がらせる数字と個々の身体で覚えるものとしての数字は、どのようにして結びつくのだろうか。北日本の専門病院で糖尿病治療を観察した際に、このような問いがなされること自体、非常にまれであった。しかし、病人をはじめ医師や看護師は日常実践において、病気の程度や症状に関する医学的で客観的な数値と個々の患者の異なる身体感覚とを比較しながら、日ごろから普遍性と多様性の関係を築くように心掛けていた。

あいだでズレが生じることになる。堤さんが診察室を去った後、医師は今日の血液検査の結果をパソコンで確認する。グリコヘモグロビン(Glycated Hemoglobin: HbA1c)という指標は、ある瞬間の患者の血糖の状態を示す血糖値とは異なり、日々の生活習慣を反映した一〜二カ月の平均的な血糖の状態を示すものである。生活の質(QOL)の向上を測る数値として疫学に広く用いられているものだ。自宅での検査と身体感覚では不調を示していた堤さんのHbA1cの数値は、医師の判断では、欧州や米国だけでなく日本人の糖尿病患者の平均値も上回る「きわめて良好な」数値であった。しかし、これを知るには病院でしかない検体検査が不可欠である。



教育入院中の患者の健康状態を示すカルテ。日々の生き方、また体内で変動する血糖値にしたがって、インスリンの量が調節される



血糖値自己測定をおこなう男性。測定器の針を指先にあてて血液を出す

ひとつの病気、ふたつの数字

「寝汗はどうなりましたか」と医師が尋ねる。六〇代の患者である堤さん(仮名)は、数カ月前からインスリン注射を打つようになったが、まだ加減がわからない。彼はインスリン治療とともに自分で血糖値を測るようになり、毎日「体重や消費カロリーなどと一緒に血糖値を『糖尿病手帳』に記録している」。

堤さんは手帳を机の上で開くと、手書きの数字を指さしながら説明する。「この日は特に問題はなかったけれど一略一水曜日の夜、トイレに行ったときにふらふらしてびっくりしましたよ」。木曜日の朝食前に測った血糖値は八三ミリグラムパーデシリットル。これは臨床では「低血糖値」とよぶ。インスリンが効きすぎることなどが原因だとされ、人によってはめまいや発汗の症状が出る。堤さんの場合は、夜のインスリン摂取量を一〜二単位減らしても良いのだが、医師には「長期合併症を防ぎたいのだから、今のまま続けてもらいたい」と指導されている。

医療従事者にとって、患者自らが血糖値を測ったり、自分の身体の好不調を客観的に把握しようとする努力は望ましいものであるが、それらの値・認識と病院でしか測れない検査の数値との

病気の体験と科学技術

病院や自宅で測定器を使って「病気を数える」のは、最近ではごく当たり前のことになっている。体温や視力はいうまでもなく、定期健康診断の検査報告書には、尿蛋白や心拍に至るまでさまざまな数値が羅列されている。いわばわたしたちの身体感覚はさまざまな目標値とともに変化している。インターネットや患者の自活動を通じて、人びとは病気に関する知識と身体感覚とを共有するようになっていく。しかし前述の事例からもわかるように、病気の数値は個々の患者の異なる身体感覚を統一するものではなく、病の体験を「普遍的な科学」と「個別的人間」とのあいだに位置づけるものである。したがって病気にかかわる科学技術を研究対象にすることは、人類の普遍性と多様性の実践的な関係を問うものであるといえよう。



80kcal=1単位。食事療法をおこなう糖尿病患者は、毎日消費カロリーを計算することが求められる



食事療法の勉強会。患者会ではともに料理を作ったり、消費カロリーを計算したり、また食事後の血糖値を測定することで、数えるという経験を通じて病を生きる

木村の方程式

木村大治
京都大学大学院教授

わたしのこれまでのアフリカにおける調査経験から、アフリカの人びとの時間感覚にかかわる重要な方程式を見出したのでここに報告する。それは以下のようなものである。

$$Ta = Tm \times 2$$

ここで、Ta (Time-actual) は何かをするときに実際にかかる時間、Tm (Time-mentee) は土地の人びとが言う時間である。

例をあげよう。

1. わたしが人びとに「この家を建て終わるまでにどのくらいかかる?」と聞いて、「一カ月」という答えが返ってきたとしよう。実際に仕事が終わるのは二カ



村の道を歩く



家を作る

月後である。

2. 「A村までは三時間で行ける」と言われたとき、実際に着くのは六時間後である。

この方程式がかなりの妥当性をもつことは多くの人が認めるだろう(ちなみにアフリカに限らず、たとえば「沖縄時間」などという形で、その地域における時間感覚のゆるやかさが言及されることはよくある)。またアフリカで暮らすとき、この関係を頭に入れておくことは精神衛生上および実用上、非常に有用である。しかしこの方程式が意味するところの解釈は、じつはそれほど容易ではない。

Taとは時計で計った時間だが、それに対するTmとは何なのだろうか。それは、「言及される世界」「期待される世界」における時間と考えることができるだろう。その「期待」とは、時間を告げられる我々の期待であると同時に、それを言う彼ら自身の期待でもあるように思う。おそらく「木村の方程式」は彼ら同士の会話のなかでも成り立っているのである。ここでは、Taの世界とTmの世界は併存しており、ものごとが実際には期待どおりに進まないという状況に裏切られ続けても、やはり人びとは期待される世界に言及し続けるのである。なぜそこまでしてTmの世界は保持されるのか。これは人類学的に重要な問題だが、この方程式はそういった問題状況をシンプルに定式化できていると思う。

暴力の採点

梶永真佐夫 民博 研究戦略センター

さきのロンドン五輪では、審判による裁定がいくつもくつがえり、かつて絶対的だった審判の權威のゆらぎが印象的だった。このことは、世界規模でネット社会化が進展し、資本力のない少数者の発信する情報さえ、国家などの強大な権力を脅かしうる世の流れにも対応しているかもしれない。

ボクシングの採点と審判

かつてボクシングの試合で判定結果がくつがえることは、まずなかった。たとえばソウル五輪（一九八八年）における決勝戦で、ロイ・ジョーンズJr.が一方的な試合を展開しながら韓国選手に判定で敗れた。審判への買収がのちに明らかになったが、負けは負けのままだった。しかし、ロンドン五輪で清水聡の二回戦判定負けが抗議によってくつがえったことは、記憶に新しい。その後勝ち進んだ清水は、銅メダルを獲得した。ボクシングの試合は、プロでもアマでも判定決着が多い。判定結果には、選手として、観客として、首をかしげることがある。ノックアウト（KO）で決まれば勝敗は明白である。KOこそが理想的な勝ち方なら、対戦者のいづれがノックアウト勝ちに近いが、公正に判断できる採点法が望ましい。だが採点は、けっこう怪しいものだ。

情報公開の時代

この改正の焦点は、審判による裁定の透明化であり、情報公開にある。同様の変化はプロボクシングでもおこなわれておこった。二〇〇六年に亀田興毅が世界王座を獲得した試合の判定が物議を醸して以来、WBAでは四ラウンドごとに審判の採点を公開するようになった。プロでも選手や観客に、裁定の過程が周知されるようとしている。

解説を聞きながらメディア観戦するのに慣れている大多数の観客は、スポーツマンシップに基づくクリーンな試合、公正な裁定を期待している。もしかすると、自分こそは真に中立的で公正な審判たりうると信じているかもしれない。しかし、当の選手たちは、舞台裏の人間関係や権力構造だつてある程度知っているものだ。だからこそ「たたきのめせば、みんな黙る！」という強い覚悟で、ふたつの拳をひき上げて四本のロープをくぐる。やはりボクシングの本質は、暴力にあるのだ。



五輪ルールでは試合中に得点が公表されるが、このときはモニターの不具合によりインターバル中に手書きで公表された（ロンドン五輪代表選考会にて）

ボクシングの採点は、イギリスでスポーツとしてルールが整備された十九世紀後半以来、減点法に基づいてきた。ラウンドごとに優勢な側に満点をつけ、劣勢な側が満点から減点されるのである。ガッツ石松や輪島功一らが日本ボクシング全盛期を飾っていた一九七〇年代まで、ラウンドごとに五点が満点だった。しかし五点法の一点は重い。よほどの差でないと減点しにくいから、引き分けが多かった。そこで細かい差を反映できるように、十点法にかわった。さらに世界戦では、どのラウンドにも一〇対一〇はつけない原則となった。つまり、プロボクシングでの採点では、いかに細かい差を数値化するかに注意を向けてきた。

アマチュアボクシングでの採点も、減点法にもとづいてきた。こちらは二十点法なので、プロよりも数値が細かい。それでも、判定をめぐる疑惑や憶測はあとをたたない。拳の打撃による肉体と心理へのダメージに対する評価は、審判の主観的判断にゆだねるしかないうえ、減点の理由が示されないからだ。そこで、先に述べたソウル五輪の判定騒動以来、五輪ルールでは採点法が改正された。有効なパンチ数を得点とする加点法になり、電子採点器の導入によって、双方の得点が試合中に観客にも周知されるようになったのである。

一三カ月太陽の国 —エチオピアの暦—

松村圭一郎 立教大学准教授

二〇一二年九月一日、エチオピアは二〇〇五年の新年を迎えた。エチオピアは西暦と七〜八年ずれていくうえに、三〇日間からなる二カ月と五日間（閏年は六日間）だけの三番目の月からなるユリウス暦を採用している。エチオピアの観光ボスターのキャッチコピーは、昔から「三カ月太陽の国」だ。エチオピアを訪れる際には、現地の暦を確かめる必要がある。国民の半数近くが信仰するエチオピア正教の行事がいつかを知るにも、農事暦の目安を知るにも、エチオピアの暦がわかっていたほうがいい。とくにエチオピア暦にそって年に七回（計一八〇日あまり）もある断食の期間を知っておかないと、キリスト教徒の多い地域では肉が食べられないこともある。さらに月のすべての日がさまさまな天使や聖人にちなんだ祝祭日とされ、敬虔なキリスト教徒の生活を規定している。「エチオピアには毎月三〇日の祭日がある」といわれる所以だ。

年については一月一日〜九月一〇日（閏年は一日）までは西暦から八年を引き、九月一日（二日）から二月三日までは七年を引



試合後の判定は、じつに緊張する瞬間だ

プロボクシング12回戦のスコアカード記入例。出典：トム・カズマレック著『あなたもジャッジだ』（2001年、リング・ジャパン）

| スコアコーナー | | 青コーナー | |
|----------|------|-----------|------|
| T. RIFIK | | O. PONENT | |
| 減点 | ポイント | 減点 | ポイント |
| 10 | 1 | 9 | |
| 10 | 2 | 10 | |
| 10 | 4 | 8 | |
| 10 | 5 | 9 | |
| 10 | 7 | 9 | |
| 10 | 8 | 9 | |
| 9 | 9 | 10 | |
| 9 | 10 | 10 | |
| 10 | 11 | 9 | |
| 10 | 12 | 9 | |
| 11 | 11 | 11 | |
| 11 | 12 | 11 | |
| 減点合計 | 115 | 減点合計 | 111 |

ドーカ・アコス・チワヤチ

| ラウンド | 赤 | 青 | 赤 | 青 | 赤 | 青 | 赤 | 青 | 赤 | 青 |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | | | | | | | | | |
| 2 | | | | | | | | | | |
| 3 | | | | | | | | | | |
| 4 | | | | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | | | | |
| 6 | | | | | | | | | | |
| 7 | | | | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | | | | |
| 9 | | | | | | | | | | |
| 10 | | | | | | | | | | |
| 11 | | | | | | | | | | |
| 12 | | | | | | | | | | |
| 合計 | | | | | | | | | | |

けば計算できる。月日は、五日〜一〇日ほどずれながら進むので、単純には計算できない。外国人の多い場所では西暦が使われるものの、公的機関やほとんどの商店では基本的にエチオピア暦が用いられている。たとえば、空港で発行される入国ビザの領収書にもエチオピア暦の日付がしるされる。日本でみせれば、「いつの領収書だ？」といわれかねない。ところが最近、都会では西暦にそったイベントもおこなわれるようになった。エチオピア暦のクリスマス（ゲンナ）は一月七日か八日なのだが、二月末にもスーパーマーケットにはサンタクロースのイルミネーションが飾られ、クリスマス商戦が盛りあがる。二年ほど前からは、新聞広告などで二月一四日のバレンタインデーにバラを送ろうという宣伝が盛んにはじめられた。商売繁盛のために、ふたつの暦を操るところは、どこかの国と同じかもしれない。



エチオピアのカレンダーには、アムハラ文字の数字によるエチオピア暦に、アラビア数字の西暦が重ねられている。さらにイスラーム暦（ラマダン明けの祝祭）への言及もある

勘定合って銭合わず

深田 淳太郎 一橋大学大学院社会学研究科特別研究員

アバウトな貝貨

パプアニューギニア、ラバウルに暮らすトライ人はタブという貝殻貨幣を、現在でも「お金」として法定通貨と並行して使っている。タブはムシロガイという小さな巻貝に穴を開けて籐の紐で数珠状につないだものである。タバコやアイスから学校の授業料や税金まで、さまざまなものがタブで価格付けされ——たとえばアイスなら貝殻二〇個、タバコは九〇個、スナック菓子は八〇個というように——売買されている。

タブは紐状をしているため、たとえばタバコを買うなら貝殻九〇個分だけ短く切って使うことができる。だが実際の売買の様子を見ていると、彼らは多くの場合、いちいち貝殻を九〇個数えたりはせずに、だいたいの目分量でタブを切っている。また、支払いの度に長いタブから必要な分を切るということもあまりせず、すでに短く切られたタブの小片を目分量で九〇個分と判断して、そのまま支払いに使うことが多い。その小片は九〇個分として受け取ってもらえることもあれば、足りないとして突き返されることもある。すなわちタバコの価格である貝殻九〇個分として支払われるのは、「だいたい

価値を決めることとお金を数えること

この「価格＝数字（額面）としての貨幣」とそれに対して支払われる「モノとしての貨幣」のあいだの関係は、日本でのそれとは明らかに異なる。八〇〇円の本を買う際に支払う百円玉八枚は、明白に八〇〇円という価格と一致する。わたしたちはこの本に八〇〇円の価値はあるかと疑うことはあっても、この百円玉八枚が「八〇〇円である」ことを疑うことはない。この価格（数字）と貨幣（モノ）の当然の一致ゆえ、わたしたちにとって貨幣を用いた経済活動と、数字を計算し操作することと限りなく同義でありうる。対するトライ人社会では、数字を計算したうえで、実際に支払われる貨幣とのあいだの折り合いをつけるまでが経済活動だということになる。こう書くと、モノとしての貨幣から離れ、記号＝数字としての貨幣を高度な計算によって統制するわたしたちの経済と、モノとしての貨幣に足を引っ張られて数字の計算どおりには上手くいかないトライ人の経済というありがちな対比に辿り着くようにも思える。



タブは婚資の支払いにも用いられる

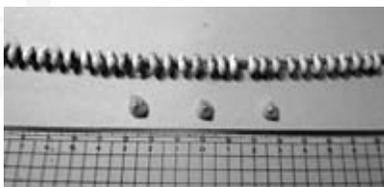
貝殻九〇個分くらいのタブ」だということになる。そこに含まれる貝殻の個数によってではなく、売り手と買い手の合意によって、支払われたタブの小片は「貝殻九〇個分になる」のである。



タブでスナック菓子を売る女性

だが本当にわたしたちはモノとしての貨幣から自由だろうか？ 考えてみよう。わたしたちは八〇〇円を支払うとき、百円玉八枚をきっちり数える。一枚でも足りなければ、それは八〇〇円ではない。たとえ売り手と買い手の合意があっても百円玉七枚が八〇〇円に「なる」ことはありえない。「数を操ることで現実を統制する」ために、わたしたちは百円玉を一枚一枚数えなければならぬのである。他方でトライ人はタブをきちんと数えない。モノとしての貨幣のズレに関係なく、あるタブ一片は貝殻八〇個という数字を実現することができる。

こう考えると、モノとしての貨幣により強く囚われているのはいったいどちらの経済なのかわからなくなるだろう。少なくとも言えることは、高度な数字の計算・操作によって厳密に統制されているわたしたちの経済は、その根この部分で貨幣を一枚一枚数えて数字と一致させるといってごく素朴な実践によって支えられているということである。



上：ムシロガイおよびタブはマーケットで売られている
下：貝殻貨幣タブと原料のムシロガイ

脳の大きさと数

山極 寿一 京都大学大学院教授

サルや類人猿にとって、数を覚えたり操作したりする能力は生きていくうえであまり重要とはいえない。目の前にある食物が多いか少ないか、仲間との関係を考慮すると自分の取り分がどのくらいになるか、簡単な算術はサルにもできる。この場合、重要なのは仲間の数だけではなく、仲間と自分との関係である。近くにいる仲間が自分より強ければ食物をとれないが、弱ければ独占できる。強い味方がいれば積極的に出られるが、いなければあきらめて別の場所に移った方がいい。

だから霊長類の集団の規模は、何頭の仲間と持続的な関係を保てるかという能力を反映する。人間以外の霊長類で平均的な集団サイズがもっとも大きいのはチンパンジーで、その数は五五である。人間が顔や名前を覚えていて常に社会的な関係を保っている仲間の数は約一五〇。これは、人間がチンパンジーの三倍の社会的接触をもてるからだと考えられている。では三倍という差は何によって生じたのか。

サルや類人猿は、仲間に接触したり毛づくろいをしたりすることによって社会関係を維持している。人間は毛づくろいをせずに、声で話しかける。毛づくろいは同時に複数の相手をもつことはできないが、声の会話は複数に向かっておこなうことが可能である。人間がチンパンジーの三倍の集団をもつことは、声の会話が同時に三人の相手をもてることを意味している。

人間の脳が大きくなったのは、大脳皮質の部分が増大したためである。じつは、この大脳皮質の脳に占める割合を霊長類の種で比べてみると、平均的な集団の大きさと正の相関がある。つまり、脳が大きくなったのは、仲間の数が増えて社会的な複雑さが増したせいなのである。それでも、人間の脳が維持できる仲間の数はせいぜい二五〇人が限界なのだ。私たちは今、インターネットを駆使してそれを超える数の人びととつき合おうとしている。脳より先に社会が変わろうとしているのかもしれない。



上：ゴリラのぞき込み行動
下：チンパンジーの毛づくろい



物質性を文化人類学する

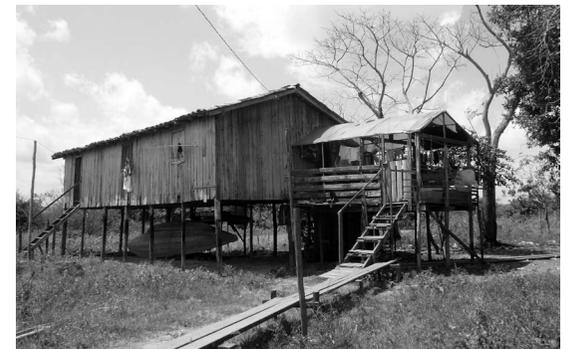
ふるや よしあき
古谷 嘉章
九州大学教授

人間は物質世界に物質たる身体感覚を介して物質的に関与する存在であるのに、「物質性」(materiality)は、文化人類学において周辺化されてきた。近年、モノ(object)に注目する「物質文化」研究の再興が見られるが、その多くは、「物質性」については自明のものとして考察しない。本研究は、「物質性」について物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて「物質性の人類学」を提案することをめざしている。

宇宙を構成するものななかで物質(matter)の割合は信じられないほど小さい。たった四パーセントほどである。あとは正体不明の暗黒エネルギーと暗黒物質が占める。そのわずかな物質を使い回して、わたしたちの世界はできている。地球上で生きるわたしたち人間もその一部である。この世界以外にわたしたちの居場所はない。もちろん「世界の外」というものを「考える」ことはできるが、それは、わたしたちが身を置ける場所ではない。

こうした類のこと、つまり物質や、物質世界たる自然界については、「自然科学における」というのが、文化人類学の基本的スタンスである。他方、物質から構成された「モノ」(object)に人間が付与している意味、要するに「文化」を明らかにすることが文化人類学の仕事というわけだ。そしてその際に、「物質性」は、所与のもの、いわば定数とみなされてきた。文化という図にとつての地と言ったら良いだろうか。

しかし、モノに人間がどのような意味を付与するのではなく、自らも物質である人間がどのように物質として物質世界を体験しているのかという問題は、文化人類学の守備範囲内、そこにまだまだ興味深い問題が潜んでいるのではないか。そう考えて、昨秋に共同研究「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」を開始し



水没と泥沼と日干しを繰り返す大地(アマゾンのマラジョー島)

た。人類学者だけでなく、考古学者や美術史学者にもご参加いただいている。

考古学、なかでも先史考古学が扱う資料は物質以外にない。しかも骨や石や土器など「固くて長く残るモノ」に偏っている。その作業の困難さは、わたしたちの生活がどれほど「柔らかくて長くは残らないもの」から成り立っているかを考えれば、すぐにわかる。わたしたちがなじんでいるモノは、いずれ腐敗したり風化したりして、解体・分解して別の物質に変ずる。モノは、物質が束の間まといっている姿にすぎない。万物は生流転のなかにある。それでも化石人骨にどんな具合に肉や皮がついていたのかは、我が身を見れば大体のところは想



砕けた後の「人生」が長い縄文土器(船橋市飛ノ台(とびのだい)史跡公園博物館)

像がつくが、もつと厄介な問題もある。同じ原石を割ってきたふたつの石器が、離れた遺跡から出土したとして、両者の関係は続いていたのかどうか。ここで、出土した大量の携帯電話とパソコンを前にして、文字資料に頼らずに現代社会を分析する任務を与えられた、未来の考古学者の困惑を想像してみよう。彼(女)は、それらの大量のモノが地球規模でつながるネットワークをなしていたことを発見できるだろうか。そもそも、現代社会の神経・血液ともいえる電気や磁気それ自体は、物的証拠を残さない。だとしたら同じ原石に由来するふたつの石器も、ひとつのモノでありつづけていたのかもしれないし、その存在の仕方は、わたしたち現代人の想像を超えるものかもしれない。

話がまた飛ぶが、世界中の教会にあるキ

リスト像は、単一の身体をもつキリストの「表象」つまり似姿だと考えられている。しかし中世の信者の振舞いなどから推定すると、物質たるキリスト像のすべてにキリストが遍く存在していたと考えるべきかもしれない。ありきたりの物質である葡萄酒や餅だつてキリストの血や肉に変ずるのだ。また信者は、聖母像や聖人像の足に触れたり接吻したりする。それ以外にも人間はさまざまなものに触れて働きかける。どうして触るのだろうか。そもそも人はなぜ触れることのできるモノを、しかもほかでもないその素材で作るのだろうか? 問いは尽きない。

物質というものについて、人類が何十年もかけて体験を通じて知り得たこと、そのすべてを集約するには、おそらく現代科学はまだ未熟である。科学が追いついてくるまでのあいだ、人びとの言うことに真摯に耳を傾けるのが文化人類学者の役割だ。蓄積されているさまざまな文化のデータに「物質性」まで届く糸を鉛直に垂らしてみたら、どんな獲物が釣れるだろうか? 例えば「マナ」の観念は、オセアニア社会の物質論なのではないか。日本語の「血のつながり」という表現の「血」とは、けがをすると出てくる赤い血

液に比喩をプラスしたもののいうより、血液とは別の物質なのかもしれない。「物質性」がわたしたちの生の基盤であることは間違いない。わたしがビルの屋上から飛ばすとすれば、重力で引張られて落下し、柔な身体は潰れて死ぬ。しかし、自然科学に任せっぱなしにせず、「物質性」の床板一枚ぐらいいは剥がして覗いてみてもよいのではないか。そんな思惑で共同研究を始め、いろいろ面白い発見がある。ご期待いただきたい。



粘土に手で触れて形を与える(ブラジル・アマゾン)

共同研究
「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」
代表: 古谷嘉章
2011年10月、2015年3月

特別展

「世界の織機と織物」

織って！みて！織りのカラクリ大発見！
ヨーロッパで紀元前から使われてきた織機を使った織機、カナダの少数民族「メネのヤマアラシ」のトゲを織り込んだ織物をはじめとして世界各地の多種多様な織機と織物を紹介します。会場の2カ所では、さまざまな織りのカラクリも体験できます。

会期 11月27日(火)まで
会場 特別展示館および
本館1階エントランスホール

関連イベント

◆ワークショップ
10月28日(日)
「インド、ラバーリーのからだ織に挑戦！」
時間 10時30分～16時30分
会場 特別展示館
講師 上羽陽子(国立民族学博物館助教)
対象 小学3年生以上(それ未満は保護者
同伴で参加可)
▼11月11日(日)
「ふたりで織りましょう！指をつかた織り」
時間 ①10時30分、②13時30分(1日2回)
会場 特別展示館

講師 ひろいぶこ(京都市立芸術大学教授)
対象 小学4年生以上(それ未満は保護者
同伴で参加可)
▼11月25日(日)
「カード織りの世界ーもしれーから生まれ
る文様とテクスチャー」
時間 10時30分～16時30分
会場 第5セミナー室
講師 日下部啓子
対象 中学生以上
(トランジヤテキスタイルアーツ主宰)
各ワークショップ定員 15名
※参加無料、要申込
申込締切 10月15日必着
※申込方法についてはチラシ、ホームページ
等でご確認ください。
※10月6日(土)・10月13日(土)・10月21日
(日)の申し込みは締め切りました。
お問い合わせ
国立民族学博物館 情報企画課
「秋季特別展ワークショップ」係
電話 06・68778・85332

◆ミニレクチャー
10月6日(土)・7日(日)・8日(月)・祝
13日(土)・14日(日)・27日(土)
11月4日(日)・10日(土)・15日(木)
23日(金)・祝・24日(土)・27日(火)
時間 13時～14時
会場 特別展示館
※参加無料(要観覧料)、申込不要
◆みんなくセミナー
左のページをご覧ください。
◆みんなくワークショップ・サロン
詳細は本誌24ページをご覧ください。

◆企画展
人間文化研究機構連携展示
「記憶をつなぐー津波災害と文化遺産」
この企画展では、私たちにとっての文化遺産
の意義を改めて見直すとともに、その文化遺産
を通じて、この震災・津波の記憶をいかに
未来に継承し、次代の社会を築き上げていく

のかを考える契機となればと願っています。
会期 11月27日(火)まで
会場 企画展示場A
■関連イベント
◆みんなく公演
「鶴鳥神楽」
日時 10月21日(日)
13時～14時30分(12時30分開場)
会場 講堂
※参加無料、申込不要(先着順)
公開講演会
「だから人類は地球を歩いた
太平洋へアメリカへ」
日時 10月26日(金)
18時30分～20時40分(18時開場)
会場 日経ホール(東京都千代田区大手町
1-3-7日経ビル3階)
定員 600名
※参加無料、要申込、手話通訳あり
お問い合わせ
国立民族学博物館 研究協力係
電話 06・68778・8209

国際ワークショップ

「アジアの布と生きる」
日本・アジアの伝統染織について製作の現場
近くで活躍される国内外6人の方を招き、現
状や展望について議論します。布が好きな方
製作・流通にかかわる方、勉強中の方、みな
お集まりください。
日時 11月3日(土) 10時～17時10分
会場 講堂
定員 450名
※参加無料、要申込
お問い合わせ
国立民族学博物館 「アジアの布事務局」
E-mail cloth@idc.minpaku.ac.jp

みんなくはなミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第413回 10月20日(土)
【特別展】世界の織機と織物「関連」
パントウの人々のラファイア織り



「草ヒロド」の布で知られる
クバの杭機(くいはた)

マダガスカル原産のラ
ファイアシの葉織維か
ら布を織るパントウ語
族の人びとは、中央ア
フリカのコンゴ盆地か
らカメルーンのバメン
ダ高原に分布していま
す。彼らが使っている
ラファイア機について紹
介します。

第414回 11月17日(土)
【特別展】世界の織機と織物「関連」
東南アジアの織機と衣装



ベトナム北部ライチウ省のルー
民族の娘たち

インドネシアやベトナ
ムを中心に、東南アジ
アとその周辺地域でど
のような織機が使用さ
れてきたかを概観しま
す。それらの織機で織
られてきた布の素材や
装飾技法、さらにはど
のような形の衣装とし
て着用されてきたかを紹
介します。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)
第413回 11月3日(土) 14時～15時
ビデオテークより
祭礼の変容を映像で見る
インド・グジャラートの女神祭礼
講師 三尾稔(国立民族学博物館准教授)
宗教祭礼は永続的なものと思われがちですが、急速に変
化することがあります。インドの女神祭礼の資料映像を
見ながら、何が、なぜ変わるのか。また、それでも変わ
らないものは何かを解説します。すでに公開されている
番組と、制作中のものを比較しながら考えてみます。
第414回 12月1日(土) 14時～15時
みんなくコレクションを語る
ネパールの金のはなし
講師 南真木人(国立民族学博物館准教授)
ネパールの女性が所有するさまざまな金の装身具は成人
や結婚のお祝いとして贈られます。砂金の採取と精錬
金の加工と販売はそれぞれ異なるカーストや民族の人び
とがおこなってきました。私が収集した金細工具や、木
の実を用いた分銅などもお見せしながらお話しします。

スタンプラリー「万博・民博ものがたり」

(ご自宅でも参加できます)
11月27日(火)まで
特別展「世界の織機と織物」に出版される織物の模様から
選んだスタンプ5種類を万博記念公園内に設置していま
す。「布」をテーマに各施設のものごとをお楽しみくだ
さい。参加賞と抽選であたる特別賞をご用意しています。

東京講演会(今回は横浜にて開催)

第104回 12月9日(日) 14時～15時
世界のパスポート/パスポートの世界(仮)
講師 陳天璽(国立民族学博物館准教授)
会場 JICA横浜会議室
定員 40名

公開フォーラム JICA委託事業
国立民族学博物館 博物館学コース
「世界の博物館2012」

7ヶ国10名の博物館専門家が、博物館の活
動や課題を報告しながら、互いに問題点を共
有し、検討します。
日時 11月4日(日) 13時～17時15分
会場 第5セミナー室
定員 70名
※参加無料、要申込
申込締切 10月26日(金) 必着(先着順)
お問い合わせ
国立民族学博物館 国際協力係
(博物館学コース事務局)
電話 06・68778・8250

●11月1日から7日は「教育・文化週間」です
文化の日を中心とする教育・文化週間の期間
中、全国各地で様々な教育・文化に関する行事が
開催されます。文部科学省ホームページで紹
介していただきますので、ぜひご参加ください。
※イベントや刊行物について、くわしくはホーム
ページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から
17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介
■朝倉敏夫・太田心平 編
『한민족 해외동포의 현주소』
—당사자와 일본 연구자의 목소리—
(邦題:韓民族海外同胞の現住所
—当事者と日本の研究者の声—)
学研文化社(ソウル)
世界には約730万人の海外コ
リアンがいるとされている。そ
のうち中国、日本、サハリ
ン・沿海州、ベトナム、蒙
州に暮らす海外コリアンの実
態と、彼らについての研究動
向を、当事者と日本の研究者
が語る。

国立民族学博物館
ミュージアム・
ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

美しい織布から広がる
手仕事とカラクリの世界を、
一年間お楽しみいただけます。

2013年のみんなくオリジナルカレンダーは、開催
中の特別展「世界の織機と織物」にあわせて、世界の
織物をご紹介します。世界各地では風土や生活文化に
見合った方法で、独自の布が生み出されてきました。
人びとの手仕事による美しい織物の数々を、日々の生
活のなかでお楽しみください。

2013年みんなく
オリジナルカレンダー「織」
定価 1,575円(税込)
※5冊以上まとめてご購入の場合
は、特別価格の1冊1,260円
※通信販売の場合、1ヵ所につき
発送手数料400円が必要です

マテマティクム

—ドイツの数学博物館

山由里子 民博 民族文化研究部



「数学」と聞いただけで、アレクシー反応を起こす人もいるかもしれない。だがそれは「教え方」「学び方」にも一因があったのではないか。数々の「仕掛け」を楽しみながら、数学の原理を体感することができる博物館がドイツにある。

マテマティクム (Mathematikum) は、フランクフルトから北に約五〇キロほど行ったところにある大学町ギーセンにある、数学に特化された科学博物館である。理論や数式を使わず、数字すらほとんど登場させずに数学の魅力を体感させる、めずらしい博物館である。

今年が開館十周年というマテマティクムの創設者および館長は、ギーセン大学で幾何学と離散数学を教えるアルブレヒト・ボイテルシュバツハー教授であり、博物館創設のきっかけは大学のゼミであったという。学生たちに作らせた幾何学モデルがあまりに見事だったので、初めて展覧会を企画したのが一九九三年のこと。その後、展示を目的とした数学教育プロジェクトを学生に企画させ、それがドイツ各地に巡回し評判をえた。一〇年足らずでヘッセン州文化庁などの後援をえて、博物館での常設展にこぎ着けた。企画展、講演会、コンサート、ワークショップを催し、年間一五〇万人の来館者を集める世界有数の数学博物館に成長したのも、「数学は楽しい」をみんなに体験してもらいたいという教授の情熱があつてこそだろう。

数学に触る

一五〇以上あるという展示物のほとんどが、いわゆる「ハンズオン」「インタラクティブ」な、触つて動かせる形式のものである。「展示物」というよりは、色鮮やかで立体的な「仕掛け」と言ったほうがふさわしい。重力とモノの形や素材の性質が生み出す動きを観察したり、パズルを解いたりしながら、数の不思議、形の妙、光の振る舞い、空間と時間の関係などについて考えさせられる。頭と同時に、手や足や耳も動かさなければ、問題が解けない。コンピュータやビデオなどを使った情

報の押し売りは最低限にとどめられており、「生」の数学と取っ組み合つていくというワクワク感をじっくり味わうことができるのである。また、数学者の多くは数学を「美」として捉えているというが、この博物館の展示物はアートとして見ても美しい。

平日は学校団体が多いのだろうが、夏休み期間に訪れたので来館者は家族連れがほとんどであった。子どもも大人も真剣に楽しんでいる。来館者の滞留時間がおそらく一番長いのは、さまざまな数理パズルが並んだテーブルで、難度は結構高い。解説プレートには独英の二ヶ国語で、背景にある数学的概念と、「七つのピースすべてを使って、六角形を作ろう」といったような問題の目的が簡潔に書かれているだけで、どこにも答えは示されていない。途中であきらめて席を立つ人もいるが、わかつたときのスッキリ感が心地よいので、解けるまでついムキになって粘つてしまう。

巧妙かつ単純な仕掛け

前述のようなシルエツトパズルは、温泉宿によく置いてあるのどかさほど目新しくはないし、「四角いシャボン玉」のように、他の科学博物館で見たことがある展示も少なくない。しかし、なるほどよくできているなど感心させられるユニークな仕掛けが定期的に追加されてゆくのがこの博物館の魅力なのだろう。

例えば、横向きの透明の筒のなかに直径一ミリほどの小さな透明のつぶつぶが一〇〇万個入つており、その内の一粒だけが黒いという。筒を回転させることによって、なかの粒を動かし、黒い一粒を探るのが目的であるが、ゆつくり何度も回転させて、じっくり目を凝らしてもこれがなかなか見つからない。紙の上の数字としては実感が湧かない一〇〇万分の一という「確率の低さ」が、まさに手にとるようにはわかるのである。

展示室以外のところに隠されている仕掛けもまた心憎い。トイレのハンドドライヤーの上には展示室と同じ解説プレートが設置されており、「毎秒三七リットル分の水滴を時速六四〇キロの風圧によって吹き飛ばす。一二本分の木に相当するペーパータオルが年間節約され、資源の保存に貢献している」云々と書かれている。作りかけの幾何学模様の壁面装飾に近づいてみると、模様を構成するひとつひとつのひし形タイルに大口寄付者の名前が刻まれている。小口寄付者にもまた楽しい装置が用意されている。コインを入れると、シューワン、シューワン、シューワン……と音をたてて、垂直に立ったまま回転しながらゆつくりと螺旋を描いて、じょうごのような逆円錐の底にある穴に落ちてゆくしくみの寄付金ボックス。理屈抜きでおもしろいので、惜しみなく小銭を落としてしまう。技あり！

マテマティクムの外観。この建物はもとは税関だった



球のかたまりをうまく組み合わせると、ピラミッドのできあがり



円錐の傾斜を変えると、なかの液体が描く「円錐曲線」の形も楕円(だえん)、放物線、双曲線と変わってゆく

自然のなかに存在する数学。「黄金螺旋」を描くオウムガイ



寄付金ボックス。渦を巻きながら、お金が落ちてゆく

最上階には4～8歳の幼児向けの「ミニ・マテマティクム」があり、身近なもので数字に親しむ工夫がこらされている。「1」の数字のところには鏡が入っていて、世界でたった一人の自分が映るようになっている

面白モノ その2

宵祭りの品定め

出雲市平田天満宮の夏祭りの宵、「一式飾」を見に行った。ハレの日、ハレの場を飾る、造形に趣向を凝らしたつくりものの数々。宵祭りのあと、囃らずも飲み屋で、その作り手たちによる品評会を耳にした。つくりものにこめられた地元の人のおもいは……。

つくりものの系譜

造形に殊更に趣向が凝らされたつくりものと、祭りや年中行事といったハレの場との結び付きには歴史的な系譜が存在する。日本では古代から中世にかけて、人びとに厄災をもたらす神霊「御霊」に対する祭りや年中行事が盛んになった。ここでは御霊の慰撫鎮送のために、衣装や被り物から踊りや歌謡まであらゆる局面で派手で奇抜な趣向を凝らすこと、即ち「風流」が重要な眼目とされ、器物の造形に趣向を凝らす「風流造り物」もあらわれた。

「上杉本洛中洛外図屏風」の函谷鉾（かんこぼこ）。舶来のタペストリーと虎皮の風流が見られる。米沢市（上杉博物館）蔵



その後、風流は大勢の見物が集まる都市の祭りにおいて一層進展し、さまざまな趣向を凝らす大規模な祭りもあらわれた。



細工見世物「とんだ霊宝ほうぼう大師ご開帳」(部分)。魚のホウボウの乾物を弘法大師に見立てた開帳を伝える錦絵。国立歴史民俗博物館蔵

一方、近世後期

から末期、江戸や大坂などの都市の盛り場や祭りや寺院の開帳において、乾物で作った仏像や、籠を組み上げた巨大な像、生身の人間以上に生々しい人形といった、造形に機智を尽くした「細工見世物」の興行が人気を博すようになった。各地のつくりものは、こうした風流と細工見世物の系譜を受けてあらわれたとされる。

確かに各地のつくりものは、毎年新奇な趣向を凝らし、意外な素材でさまざまな造形を作り上げている。しかし、実際につくりものの現場に足を運んでみると、これらの系譜で片付けるだけでは不十分に思えてきたのである。

平田の「一式飾」競技大会

島根県出雲市平田の「一式飾」を初めて見に行ったときのことである。平田の一式飾は陶磁器や台所用具など同類の器物一式で作るつくりもので、寛政五年（一七九三）、表具師の桔梗屋十兵衛が茶道具で大黒天像を作ったのが始まりとされ、七月の平田天満宮の祭りと前日の宵祭りに一式飾が町内各地の飾り宿に飾られる。宵祭りの日に平田に着いたわたしは、宿に荷物を置くくと食事を取りに町に出た。一式飾が飾られた方々の飾り宿を見ながら食

事の店を探したが、時間が遅く飲み屋しか開いていない。適当に店を選んで暖簾をくぐり食事を取っていると、常連らしい年配の男性たちが店に入ってきた。既に酒が入って上機嫌で、注文もそこそこ何やら声高に話し始めた。聞かせてくる彼らの話によると、彼らは一式飾競技大会の表彰式の後らしかつた。平田では毎年一式飾競技大会が催され、宵祭りの日に審査員の投票によって特選・準特選・努力賞・アイデア賞が決まり、表彰式がおこなわれる。この年の表彰式は大いに盛り上がったらしく、その興奮が未だ冷めやらずといった様子であった。

というのも、特選が一度目の投票では同数で、決選投票で僅差でようやく決まったからである。特選に選ばれたのは、毎年地元祭りの題材にした巧みな一式飾りで定評がある町内であった。一方、惜敗した町内も毎年見事な一式飾を作っていて、この年も特選の町内にひけを取らない出来映えであった。にもかかわらず敗れたのは、彼らによれば運が悪かったという。その町の一式飾の「横綱の土俵入り」は、元々綱取りが期待される地元出身力士を題材にしたものであった。しかし、折悪しく角界をゆるがした

不祥事との関係が判明して名前を出せなくなった。それがなかったら特選が取れたはずと彼らの意見は一致していた。

地元ならではの盛り上がり

決選投票の話が一段落すると、話はほかの一式飾に移った。競技会の結果は全体的には彼らにも概ね納得のいくものであったが、細かい点ではいろいろ思うところがあるらしい。曰く、ある努力賞の町内はいかにがんばり不足に映ったらしく、「努力賞は本当に努力しな

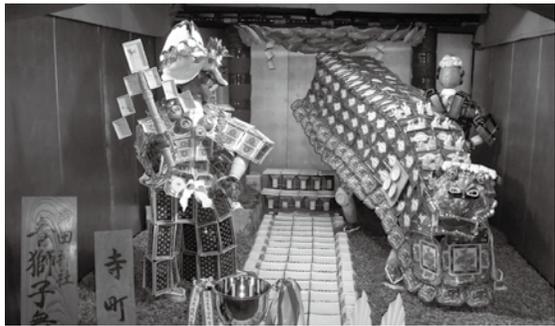
平田一式飾 陶器一式「横綱の土俵入り」(西町)



いと駄目だね。同じ努力賞でも前年より大分進歩が見られた町内は、「今年は大分頑張ったよ」。この年封切られた地元私鉄が舞台の映画に因んで雑誌の表紙やカラーページで電車を作った町内に対しては、題材はいいが器物をそのまま用いる一式飾としては、「雑誌を破いちや駄目だな」。コミックがテレビや映画化されて人気の音楽ドラマを題材にしたものは、そのドラマを知らない彼らにはまったく理解不能で、「○○(ドラマ名)って一体何なんだ?」等々。彼らの話は酔った勢いも手伝い一層熱が籠もり、その後も延々と続いたのである。

この夜の彼らは、決選投票となった一式飾の出来映えから努力賞への苦言までいいも悪いもすべて嬉々として語り、心底楽しそうなのが印象的であった。ここでは、わたしのようないち飾を初めて見る余所者には思いもよらないさまざまな点が問題とされていたが、注目されたのは、余所者にも理解が容易な風流や細工見世物の系譜に繋がる造形面よりも、題材の地域性や時宜性、一式飾の範疇か否かといった、地元の人びとでなければわからない内容が多くを占めていたことである。

平田の一式飾の面白さは、毎年祭りですれを作り、見て、批評するなかで培われ、体得され、共有されてきた、地元の人びとならではの想いや感覚に支えられてこそ成り立つ。この夜の彼らの一式飾の品定めからそんなことを強く感じるとともに、そんなふうによく豊かに一式飾に接することができる彼らに羨望を覚えつつ店を後にしたのであった。



平田一式飾 陶器一式「持田神社 青獅子舞」(寺町)

笹原亮二 民博研究戦略センター

同じ志をもっているにもかかわらず、それぞれが独自に活動をするのはもったいない。情報を交換し、議論を重ねることが、お互いを高め合い、より大きな活動へと発展していくことになるだろう。

学生の力を結集

FTSNとはFair Trade Student Networkの略で、フェアトレードを知りたい、広めたいと考える学生を中心としたネットワークだ。「せっかく同じ活動をしているのだから、大学を超えて協力し、発信力を大きくしていこう」というコンセプトのもと、二〇〇四年にFTSNは誕生した。フェアトレードをもっと多くの人に知ってもらうことを目指し、フェアトレードの活動を続けるひとりひとりの力は小さくても、それらが集まれば、より大きな影響力を生み出す事ができるとわたしたちは信じている。

現在、FTSNでは国内各地域に参加団体の規模により、支部とエリアをもっている。参加団体の多い関東・関西では、それぞれ支部が中心になりFTSN規約に則って、コンスタントに活動をおこなっている。参加団体の少ない北海道・北陸・九州ではエリアが活動の基盤となつている。また、中部では姉妹ネットワークである「328」^{ミッパ}がその役割を担っている。各支部・エリアはそれぞれに事務局を持っており、各事務局が独自に動くだけでなく、FTSNジャパンとして、日本全国で一体となる動きもしている。

関西には二〇一二年現在、大阪・兵庫・京都・奈良に一八のフェアトレード推進学生団体がある。こ

の一八団体は普段その団体がある大学・キャンパスで活動をおこなっているが、それをつなぐのがわたしたちFTSN関西支部である。メンバーは一〇人程度で、各自の大学の団体に所属している学生だけでなく、自身の大学にフェアトレード団体のない学生が中心となっている。

FTSNジャパンとしては、年に一度、「フェアトレード学生サミット」を「328」と一緒に開催している。このサミットは今年で一〇回目となり、FTSNが学生のネットワークとして、中心になる活動である。サミットは毎年九月に合宿形式でおこなわれ、全国各地のフェアトレードに興味のある学生が集まる場になっている。二〇一二年度は東京で開催され、約二〇人が参加し、東京経済大学の渡辺教授やフェアトレード・ラベル・ジャパン事務局長の中島佳織さんなどを講師にさまざまな角度から見たフェアトレードについて学ぶ予定だ。また、ディスカッションやスポーツレクリエーションなどの活動もおこなう。

活動の三本柱

FTSN関西支部は、「フェアトレードの発信」「フェアトレードの学び」「ネットワークづくり」を三本柱として活動している。

●フェアトレードの発信

「フェアトレードを普及させたい」という思いで、発信活動をしている。多くの市民の方が集まるイベントやインターネット上での発信を中心に活動している。二〇一二年二月には大阪の大規模な国際協力のイベントであるワン・ワールド・フェスティバルに所属団体と出店し、子どもから年配まで多くの方にブースに足を運んでいただき、フェアトレードについての発信をおこなった。また、ホームページ・ブログをはじめ、Twitter・Facebookを活用し発信活動に努めている。

●フェアトレードの学び

わたしたちはフェアトレードの発信をおこなうだけでなく、わたしたち自身が所属団体の方たちとともに知識を高める活動をおこなっている。わたしたち学生は単に行動するだけではなく、学び、考えたいうえで社会に対して活動する必要があると考えるからだ。また、フェアトレードについて学ぶことで、自らの活動の意義を問い直し、自らの活動に対するモチベーションも上げることができると考えている。

学習活動では、二〇一二年三月、ゲスト講演、ディスカッションを盛り込んだ学習企画「Cafe GIFT」を開催し、学生をはじめとする多くの方々に参加していただいた。五、六月には、高校の出張授業を受け持ち、実際に高校生にフェアトレードと国際協力について講義し、ともにふれ合う機会を持った。このような高校や小学校などの出張授業も熱心におこなっている。

また、学びを提供するだけでなく、わたしたちが深く考え、学ぶことを目標に、ミーティング毎に

メンバーが簡単に研究発表し、それについてディスカッションすることで、知識や学びを深めるようにしている。そして、学んだことを学習イベントなどで実践に結び付けられるよう活動している。

●ネットワークづくり

フェアトレードの活動をしているのは、学生・社会人・NGOメンバーなど、さまざまである。わたしたちは、そのような熱意のある方々が、一堂に会せば何か大きなアクションにつながられるのではないかと考え、毎月一回ネットワークミーティングを開催している。フェアトレードを広めていくうえでの悩みや課題・イベントの情報などを共有し、話し合う場となっている。参加者の発想やパッションをもとに、何らかのアクション実現につなげていきたいと思う。

FTSN関西の目指すところ

このような活動をとおして、わたしたち学生も社会に大きなインパクトを与えることができるのではないかと思う。フェアトレードを広めるためにまず学ぶところからはじめ、つながり、そして伝えていくことで生産者の方の暮らしにプラスの影響を与えたい。

FTSNはフェアトレードを広めたい学生たちがいて、その価値が最大限生かされる。個人やひとつの団体ではできないような大きな企画や情報の発信がFTSNの存在によって可能になる。FTSNばかりが活動の主体になるのではなく、学生たちのニーズを集め、多くの学生たちとのつながりを生かした活動をしていきたい。



事務局、イベントの打ち合わせ・会計相談などの話し合い



ネットワークミーティング。関西の約20団体が合同でおこなう企画の話し合い



フェアトレード学生サミットin名古屋・フェアトレードウォーク



ネットワークミーティング。フェリシモのフェアトレード・エコバッグにスタンプを押しオリジナルバッグをつくるワークショップ



今宮高校出張授業

走ることの理由

いとう あつのり
伊藤 敦規

民博 研究戦略センター

低酸素濃度の高地が培う身体能力

ロンドン・オリンピック開幕二ヶ月前、米国アリゾナ州フラッグスタッフで強化合宿中のマラソン日本女子代表選手に出会った。ここは競泳日本代表の合宿先としても知られている。治安と交通の便の良さ、高地砂漠気候による晴天日の多さと昼夜の寒暖のメリハリ、そして標高二一〇〇メートルという立地が、スポーツ選手の身体能力強化に適した土地なのだろう。

では、低酸素濃度の高地に暮らしている人たちの身体能力はどうだろうか。フラッグスタッフの人口の一割近くを占めるのが先住民で、先住民ホビの保留地はここから一五〇キロメートル離れた標高一八〇〇メートル地点に位置する。村落の住居から崖の下の畑までの距離は、もつとも近くても数キロメートルはある。移動手段は今でこそ自動車だが、一昔前までは徒歩や駆け足だった。炎天下での長時間にわたる農作業、断食を伴う儀礼的ダンスやその練習を数日間にわたって遂行する強靱な体力に筆者はいつも驚かされる。

一〇〇年前のことだが、ホビはオリンピック選手を輩出した。男子陸上の米国代表になったルイス・テワニマは、一九〇八年のロンドン大会のマラソンで九位入賞、



ルイス・テワニマ記念マラソン大会で配付されるTシャツ

一九二二年のストックホルム大会の一万メートルで銀メダル獲得という偉業をなした。現在でもホビ高校には、クロスカントリーや中長距離競技の全米上位クラスの選手が男女ともにゴロゴロいて選手層が厚い。陸上競技選手としての資質と身体能力は高いように感じられる。

健康と儀礼のために

保留地内には糖尿病予防のための「二〇〇マイル(約二六〇キロメートル)走破クラブ」というマラソン組織もある。参加登録は五歳からなので、老若男女が早朝や夕方に路側を走ったり歩いたりする姿をよく目にする。興味深いのは、ランナーとすれ違う車から発せられる「ありがとう!」という声だ。ホビの友人は「走るとは、単なるスポーツや生活習慣病予防やひとりの時間を楽しむことじゃないんだ。乾燥したこの地に雨雲を呼び寄せる農耕儀礼の一環なんだよ。だからランナーに感謝の意をあらわしているのさ」と説明してくれた。今春民博で開催した研究公演『ホビの踊りと音楽』に参加して、演者の怡幅の良さを目の当たりにした方々はにわかには信じられないかもしれないが、保留地では今日も地を駆ける音と「ありがとう!」の言葉が響いていることだろう。

みまぐ 私の逸品 藁算

標本番号 K0003061
 地域 沖縄県宮古列島宮古島
 受入年 1975年

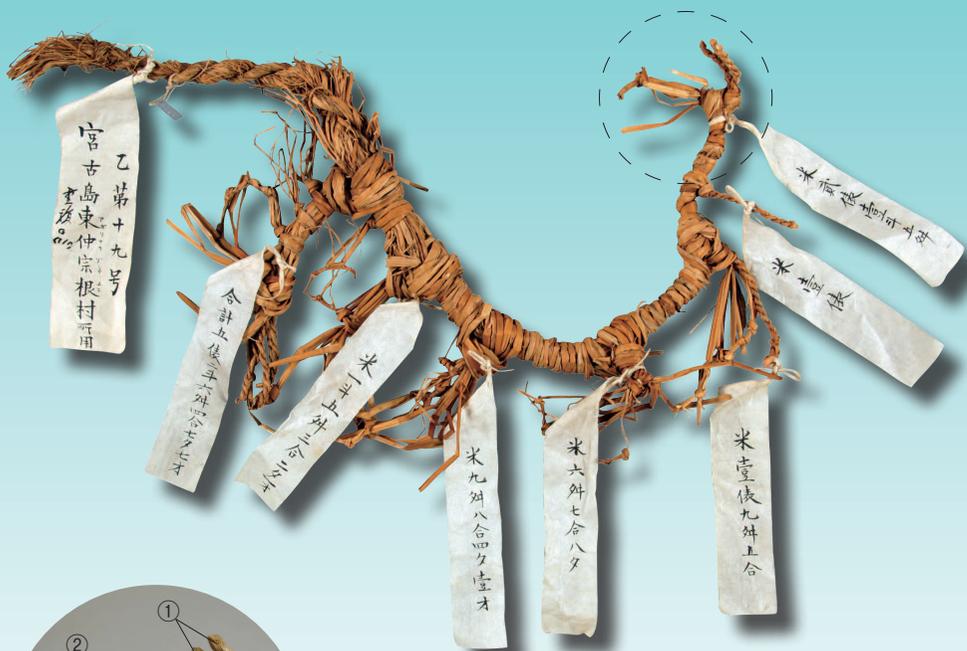
北海道大学アイヌ・先住民研究センター 特任教授

佐々木 利和

藁算わらざんは稲藁やアダンの葉を結んで数字を示す記標文字(結繩)の一種であり、バラサンなどともいう。同種の記標文字キープ(Quiju, Kipu)はインカでも用いられていたことが知られている。琉球王府時代から一九〇三(明治三六)年ころまで使用された。とくに八重山やえやまや宮古みやこでは人頭税じんとうぜいの徴収資料として用いられた。そのため課税対象者数や上納米、上納布など対象によりさまざまな形態のものがある。

図は「乙第十九号 宮古島 東仲宗根村所用」としるされた付箋ふせんが付されたもので、戸数ごとに上納米を示したもの。右端には「米式俵壹斗五升」の付箋があるが、その先をよく見ると①藁を縄状に纏まとったものが二本、②その左側に先を結んだものが一本、③単なる藁が五本見えるはずである。つまり①の縄状に纏った藁は一本で一俵、②は一本で一斗とそれぞれ数えるから、したがって全部で二俵一斗五升という数字が出てくる。

この場合の戸番号は右から一番戸と数え最後が六番戸。そして一番左端にこの地区の上納米の合計が「五俵二斗六升四合七勺七才」と藁算と付箋でしるされる。この藁算は田代安定たしろやすだて氏が収集したもので、明治二〇年に帝室博物館に収められ、翌年に東京帝国大学人類学教室に移管された後、昭和五〇年に民博に寄託された。民博の藁算は、このように付箋をつけて理解しやすくしているが、同時に彼の報告書にも細かい記載がある(『沖縄枯縄考』として刊行)。



「米式俵壹斗五升」の部分を拡大したもの

「なんくるないさ〜」とはいかない 沖縄離島の高齢者福祉

かがや まり
加賀谷 真梨
民博 機関研究員



いつまでも高齢者が島で楽しく暮らせるよう福祉活動が始められた

今日は「神司(つかさ)」として祭祀(さいし)に従事する
デイサービスの女性スタッフ(左)



真剣に稽古中の三線(さんしん)サークルの面々



沖縄の離島イメージ
二〇〇一年に放映され沖縄ブームを巻き起こしたNHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」。自然豊かな沖縄の離島に生まれた主人公恵里は、その自然に培われた明朗さとバイタリティを活かして東京で看護師となり、その後島に戻って訪問看護師として島民に尽くす。そんな彼女を常に支えてきたのが、元気なオバアをはじめとする仲良し家族であり、島に生まれ育った人は皆家族のみならず親密で人情味に溢れている。だからこそ、帰郷し恩返しをしたくなる島。沖縄の離島は、そうした相互扶助の精神が生まれる場として描かれてきた。

「結」で支えるやさしいまちづくり

「ちゅらさん」で表象された互助社会像は、とりわけ高齢者福祉政策において積極的に援用されている。わたしの調査地を含む複数の離島から成る町では、「地域に暮らす高齢者を『結』で支えるやさしいまちづくり」を高齢者の口が恐ろしいから」と、述べた。ヘルパーに守秘義務があることを知っていても、周囲にどのような評判を立てられるかわからないという不安感から利用しなかったという。またこの女性は介護に従事しているあいだ、隣近所に要介護者が放つ臭いが漏れ出ていないか、拭き掃除に余念がなかったともいう。ケアのあり方をめぐって家族ないし「家」の評価がなされるといふ認識があり、それゆえ夫婦だけで親のケアを専有しヘルパーの利用を留保したことがわかる。また、高齢者自身による福祉の利用控えもみられる。島では忌中に公的活動を控えることが規範化されているが、こうした規範がデイサービスの利用においても踏襲されるようになった。「本当は行きたいけれど、何を言われるかわからないから休む」と、心身ともに健康であるにもかかわらず、親族が逝去すると他の島民の目を憚り、忌明けまで隠遁生活を送る高齢者も少なくない。さらには、男性のデイサービス利用率の低さも指摘できる。「遊んでいると思われたくない」という声に示されるように、〈農作業〓仕事/デイサービスの利用〓遊び〉という価値体系が基底にあり、前者に高い価値が置かれていることが、その背景として指摘できる。わずかな事例だけでも、従来からの規範ないし価値体系の残滓がみてとれ、それを踏襲しているか否かが常に周囲の目にさらされ、

福祉事業計画の基本理念に掲げ、島のお年寄りが最期まで島で暮らせるよう島民参加型の福祉活動を推進している。一例として、各離島内でホームヘルパーが養成され、高齢者の在宅介護サービス受給を可能にする手筈が整えられた。また、サトウキビ収穫時の協同労働に相互扶助的精神の残存を目されたある離島では、二〇〇〇年に県の介護事業のモデルに指定された後、高齢者のためのデイサービスと配食サービスが島民の手で開始された。

高齢者福祉の難しさ

しかし、島民間で展開される高齢者福祉の活動は、ドラマの世界のように「なんくるないさ〜(何とかなるさ)」とはいかない。例えば、家族の介護負担を軽減させる目的で養成されたホームヘルパーは、単身世帯や息子との同居世帯において積極的利用がみられるが、要介護者が嫁や妻と同居している場合には、その利用が控えられている。その理由を、姑と舅の在宅介護経験を有するある女性は「人逸脱は非難の対象となるさまがみてとれよう。島民は、そうした他者のまなざしを熟知しているため、あらかじめ行為を自制することが少なくない。高齢者地域福祉という新たな理念は、そうした既存の規範との摺り合わせのなかで展開しているのである。

それでも島には恵里がいる

沖縄の離島には、「ちゅらさん」で描かれたような親密な関係から導き出される人情味や相互扶助の心性が確かに息づいている。しかし、親密さは両刃の剣であり、前述したように、他者の評価を気にした自由のなさもある。こうした社会の行方を左右するのが、高齢者福祉の拡充に奔走している恵里世代の青年らだ。彼らは、激動する社会の狭間で島の行く末を案じているからこそ、福祉を通じた島社会の活性化に挑んでいる。そうした彼らの活動を正当化し、ときに口実として存在するのが、結の精神の現存を指摘し、福祉活動の旗振り役となった島外の人間である。「変化」は常に島外の人間との相互作用のなかで牽引される。だが、国や自治体の制度の運用など、〈外〉と〈島〉とを媒介する恵理のような人材が島には確実に育っている。島の未来は彼らに託されている。

10月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が来館された皆様の前に登場します! 「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

7日
(11月11日)

話者: 齋藤玲子 (国立民族学博物館 助教)
話題: アイヌの織物
会場: 本館展示場内ナビひろば

14日
(11月11日)

話者: 樫永真佐夫 (国立民族学博物館 准教授)
話題: ベトナム、黒タイの機織り文化
会場: 本館展示場内ナビひろば

21日
(11月11日)

話者: 上羽陽子 (国立民族学博物館 助教)
話題: 見方を発見 — 染織資料と出会ってみよう
会場: 南アジア展示場

28日
(11月11日)

話者: 吉本 忍 (国立民族学博物館 教授)
話題: 中南米の機織と織物
会場: アメリカ展示場

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

編集後記

数といえば雑誌の編集ともかかわりが深い。というかじつに深刻な問題である。原稿の締め切り、校正や印刷直前の責了の期限、どれも残りの日数に追われる点では共通しているが、ここでは原稿の字数についてはなしである。執筆者に原稿依頼をする際、当然のことながら締切日と原稿の字数を指定する。しかし、こちらの依頼どおりの文字数でいただけるとは限らない。たいていは、やや多め、なかには依頼した長さの5割くらいオーバーして届くこともある。編者はその都度執筆者に短縮の依頼や短縮例を提案するが、期日のせまるなか、やりとりは時間とのたたかいだ。一番こまるのは、最終校正の段階で大幅に加算される場合だ。それでも近年はデスクトップ編集技術のおかげで、PC上で画像の大きさ、行数や行間を調整することで、文字数の多少の過不足もある程度融通がきくようになった。編者がこんなことを言うと元も子もないが、この編集後記もそのお世話になりそうだ。(庄司博史)

2012年9月号「地球ミュージアム紀行」(p14-15)において、編集作業の過程で著者の意図しない内容が掲載されてしまいました。著者ならびに関係者各位、読者のみなさまにご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。正しくは下記の通りです。

1. p15 後ろから5行目
コンピュータの技術サポートが中止され、
2. p15 後ろから3行目
一〇〇年前の織機は世代を経て現役で活躍しているが、コンピュータ制御の機械は動かなくなったときに技術サポートが中止されているとどうしようもない。

●表紙: トランプ遊びの人形 標本番号: H0150752 地域: ポルトガル

次号の予告

特集 どこへ行く日本学?(仮)

月刊みんぱく 2012年10月号

第36巻第10号通巻第421号 2012年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 庄司博史(編集長) 小川さやか 樫永真佐夫
久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝
制作・協力 財団法人千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

